様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２９ 日現在

機関番号：３２８０８
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ０４４６８

研究課題名（和文）エビデンスに基づく家族関係再構築支援プログラムの確立

研究課題名（英文）Establishment of evidence-based support program for rebuilding family relationships

研究代表者
福丸　由佳（Fukumaru, Yuka）

白梅学園大学・子ども学部・教授

研究者番号：１０３３４５６７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：よりよい家族関係を構築するための支援プログラムを里親家庭と離婚家庭を対象にそれぞれ実施し、その効果を検討した。また、支援の質の向上や支援者支援の観点から、支援者に向けた実践も行い、心理教育プログラムの意義を論文等で発信した。親・養育者向けの実践は、コロナ禍の影響で中断を余儀なくされたため、エビデンスの明確化に関する一部の発表は今後の課題となっている一方、オンラインによる実践と普及により、支援の広がりという成果も得られた。また、離婚を経験する親子への支援で得られた知見と、親子の声を軸とした書籍を刊行し、家族関係の移行期における支援の意義とその課題について社会的諸問題との関係も踏まえて論じた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、ポピュレーションアプローチに基づく予防的な家族支援プログラムの導入、社会文化的な状況に即した実践、およびその効果の検討を試みたものである。生理的指標による効果検討は今後の課題として残ったが、一方でオンラインによる支援の開発という新たな展開を得、より多くの親・養育者や支援者にプログラムを届けることが可能となり、支援者支援の観点からも、今後継続的な取り組みを行うための基盤を構築した。また、離婚をとりまく制度や規程に関して継続的な議論がなされる中、当事者の声を軸とした書籍を刊行したことで、単に家族や家庭の問題とせずに、周囲の理解や社会の問題としてとらえる視点の重要性を改めて問いかけている。

研究成果の概要（英文）：Support programs for building better family relationships were implemented for foster families and divorced families, and their effectiveness was examined. In addition, from the viewpoint of improving the quality of support and supporting supporters, practices for supporters were also conducted, and the significance of the psychoeducation program was disseminated through papers. While some of the practices for parents had to be suspended due to the Corona disaster, and some presentations on clarification of evidence are still to be made in the future, the online practice and dissemination of the program also produced results in terms of the spread of support. In addition, a book on divorced families was published based on the findings of practice and the voices of the parents and children involved, discussing the significance of support during the transition of family relationships and its challenges, taking into account its relationship with social issues.

研究分野：臨床心理学

キーワード：家族支援　離婚　里親　親子　心理教育プログラム　支援者支援　家族関係の再構築　ひとり親

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

家族のありようが益々多様化する現代社会において、離婚による夫婦関係の解消や、実親と暮らせない子どもが里親と暮らし、里親家族としての関係を築くなど、関係性の危機に遭遇しながらも家族関係の再構築を求められることは珍しくない。年間 20 万人前後の子どもたちが親の離婚を経験し、この十数年で里親･ファミリーホームへの委託数は 1.5 倍以上に上昇している状況の中で、子どもの育ちを保証し、安心･安全な親子･家族の関係を支援するシステム作りは喫緊の課題である。特に親の養育を支えるプログラムの実施など、予防的観点を視野にいれたポピュレーションアプローチの観点からの取り組みは、こうした状況にある親子はもちろんのこと、すべての親･養育者にとっても意味がある。

こうした状況を背景に、研究代表者は、海外で開発された支援プログラムを日本に複数導入し、さまざまな状況にある親子･家族に向けて実践と普及、研究を行ってきた（福丸，2020）。なかでも、里親里子の関係構築をささえる支援プログラムや、離婚前後の親子に向けた心理教育プログラムの実践など、家族関係の移行期を支える予防的な取り組みに力を入れてきた。

２．研究の目的

こうした背景を踏まえ、危機に遭遇しながらも家族関係の再構築が求められることの多い、里親家庭と離婚を経験する家庭を対象に、家族関係再構築に向けた支援プログラムの実施と効果測定を通してエビデンスを明確化することが、本研究の第一の目的であった。具体的には、まず里親家庭を対象とした研修時に CARE（Child－Adult Relationship Enhancement 以後 CARE）という米国で開発されたトラウマインフォームドな視点をもつペアレンティングプログラムを3回にわけて実践し、前後調査と生理的指標（唾液ホルモン）を収集しその分析を行うこと、また、同じく米国で開発された離婚家庭に向けた心理教育 FIT（Families In Transition 以後 FAIT）を日本の状況に合わせて改編し、FAIT プログラム（以後 FAIT）とし、2 回にわけて実施したうえで、親の意識を中心に実践の効果を検討することを目的としている。

また、それぞれのエビデンスから導かれる再構築のプロセスを明らかにし、両プログラムを包括する家族関係再構築の理論モデルを確立することを第二の目的とした。これによって、子育て中の親子に資することに加え、支援の質の向上および、支援者支援という側面も兼ね備えている。

３．研究の方法

(1)当初予定

まず、1 年目は里親を対象とした CARE のパイロットスタディを行い、その結果をまとめて論文化し、さらに、その結果を踏まえて 2 年目後半から実施前後の効果測定を開始して、3 年目終了時にエビデンスを明確化する方向で実施を計画した。また、FAIT については、プログラムの普及および支援者支援の観点から、学会などのワークショップにおいて紹介を兼ねた実践を行い、並行して親に向けた実践と前後の調査を行うこととした。

(2) コロナ禍の中での研究計画の変更

研究データの収集に時間がかかる中でコロナ禍の状況となり、本研究の後半は計画の変更を余儀なくされた。まず里親向け CARE の実践は、複数回の対面実施や、唾液ホルモンの収集といった方法を前提とし、その前後データを収集していたため一時中断を余儀なくされた。また、離婚家庭向け FAIT の実践も対面を前提とした実施と前後の調査計画であったため、一時中断せざるを得ない状況になった。

一方、この時期は、非常事態宣言下ということで、ただでさえ家庭での子育ての負荷がかかることに加え、奇しくも体罰禁止の法律の施行時期とも重なるということで、親を支える取り組みは急務の状況でもあった（座談会：中板･福丸･高祖，2020）。

特に本研究の対象は、リスクを抱えやすい親子･家族であり、本研究のような実践を伴う取り組みは、日々の子育てに資する面も少なくないため、再開の時期を待つよりも当初の予定を変更し、さまざまな方法で実践への道筋を模索すること、具体的には、研究計画を変更してオンラインによるプログラムの開発をめざすことを優先することにした。

こうした状況を背景に、CARE、FAIT 双方のプログラムのオンライン化とそれに基づく実践方法の確立を優先する計画とし、コロナ禍終息後には可能であれば研究を再開し、当初の計画に基づいた効果研究も継続することとした。同時に、FAIT プログラムによる研究は、実践が思うようにできない中で、これまでのグループ実践による知見の蓄積を踏まえて書籍を刊行することも計画に加えた。

４．研究成果

(1)実践の効果測定

①里親への CARE プログラムの実践と効果測定

CARE については、まず 1 年目にそれまで行ってきた実践時のパイロットスタディ（前後の質問紙調査）の結果を紀要論文として発表した（福丸ほか，2018）。これは、実施前と実施後1か月、3か月時点で、PSI や親の養育スキルなどについて質問紙調査を行ったもので、参加後にプログラムの内容を意識した群では、実施3カ月後時点のストレスや、里子をむずかしい子どもと感じる程度が減少しているということ

が示された。
この結果を受けて、2019年から生理的指標を含む前後比較を開始したが、研究の進捗が遅れたことに加え、コロナ禍の影響を受けたことにより、2023 年 3 月に対面実施を再開するまで、分析に充分なデータを得ることが困難であった。そのため、得られた全データの分析による研究成果の発表はこれからという段階である。現在までのところでは、ペアレンティングプログラムの実施により、子どものペースを尊重した肯定的なコミュニケーションが多くなる傾向が示されており、今後、この点と唾液中のホルモン濃度の結果を合わせて検討し、学会発表および、論文化を急ぐ予定である。
またこの間、分担者を中心とした地域保健現場の CARE の実践研究で、2〜6 歳の子どもを持つ母親を対象に RCT（ランダム化比較検査）による効果検討を行ったところ、1 回 3.5 時間での実施によっても、母親の幼児に対する不適切な育児やうつ状態の軽減、子どもとの否定的な関係性の認知を改善するといった効果が示された（木村ほか, 2022）。
また関連して、これらの一連の実践および国内の普及状況、取り組みの意義や今後の課題について、国際学会のシンポジウムで口頭発表を行った（Fukumaru & Kamo, 2021）。

②離婚を経験した親への FAIT プログラムの実践と効果測定
FAIT プログラムについては、方法で述べたように、研究の進捗が遅れる中、コロナの影響をうけて対面実践時の前後比較を継続することができなくなった。そこで、以下に述べるようなオンライン実践を実現化させ、親向け支援を継続すると同時に、論文と書籍化を通して成果発表を行うという計画の変更を行った。

(2)オンライン版プログラムの作成

本研究で実施するプログラムは、いずれも米国で開発されたもの、オンライン化の過程はさまざまな検討が必要であった。特にロールプレイをふんだんに含む CARE プログラムでは、対面時と大きく変わらないロールプレイの考案や、実施人数の検討など、開発チームである米国とも度々やりとりをしながら 2020 年度末にオンライン版の I-CARE（インターネット CARE）による実施がほぼ可能なところまでこぎつけることができた。特に、画面上でのロールプレイの工夫や、適正な参加者数、時間などは、やはり対面時とは大きく異なり、さらに機器操作のスキルも必要となるため、ファシリテーターがスムーズに実施できるようになるためのコンサルテーションを数回にわたって実施し、共有化やスキル練習を行った。
また、FAIT プログラムでもオンライン化を図り、参加経験のある人を対象とした試行実践を経て、親を対象としたオンライン実施が可能であることを確認した。これを受けて、2020年度後半からはオンラインによる親向けの実践を開始した。これらのオンライン版開発経緯や実践の課題などについて、それぞれ論文や学会発表を通じて成果発表を行った。（曽山ほか, 2021, 福丸, 2021）。

(3)支援者支援の実践と研究
両プログラム共に、支援者向けにも使用してきた経緯を踏まえ、特に FAIT の実践については、学会の際に実施した専門家向けワークショップで得たデータを分析し、支援者の置かれた現状の把握と、支援者支援における心理教育プログラムの果たす役割についての論文を発表した（福丸ほか, 2022）。また、これまでの離婚を経験した親と子どもに関する大規模調査から見えてくる現状と課題について、特集記事としてまとめているが（横山ほか, 2022）、その際にも、本研究のこれまでの実践とそれに伴う知見を踏まえて執筆している。

(4)実践と研究の書籍化
当初の効果研究の計画変更をせざるを得なかったことを受け、エビデンスの明確化とは別に、離婚を経験する親子に向けた FAIT プログラムの実践をベースに、書籍を刊行した（福丸, 2023）。これは米国で開発されたプログラムの導入にあたって必要だった改編や試行的な実践など、これまでの流れを振り返り、また取り組みを広く紹介すること、さらにそれらを当事者の声を通して見えてきた支援者の気づきや、社会における課題という、より広い視点から論じていくことを軸としている。また、これまで行った調査、たとえば前後における親の意識変化についてのパイロットスタディや、青年期の子どもに焦点をあてた実践と考察などの結果も踏まえつつ、3部構成から成る。具体的には、Ⅰ離婚のプロセスを見つめて、Ⅱ親子の声を聞く、Ⅲ社会の中における離婚となっている。

<引用文献（引用順）>

① 福丸由佳 2020 家族関係における夫婦の葛藤、親子の葛藤-子どもにとっての親の離婚・再婚、親からのマルトリートメント 子ども学8巻 87-106.
② 中板育美・福丸由佳・高祖常子 2020 座談会 なぜ体罰はいけない 逆境的小児期体験が及ぼす影響と虐待予防 地域保健 7 14-31
③ 福丸由佳・伊東ゆたか・木村一絵・加茂登志子 2018 里親向け研修における CARE プログラムの効果の検討 白梅学園大学・短期大学紀要 54 55-65
④ 木村一絵・石垣和子・加茂登志子・福丸由佳・重松由佳子・賀村悦子・小柳愛子・内田絵利子

2022 2－6 歳の幼児の問題行動が減少することを希望した母親に対する地域保健おける子育てプログラム CARE の効果 石川看護雑誌 19 65-76
⑤ **Fukumaru Y., & Kamo T., 2019 CARE Dissemination in Japan. PCIT International Biennial Convention. In Chicago.**
⑥ 曽山いづみ･大西真美･杉本美穂･大瀧玲子･山田哲子･福丸由佳 2021 「離婚を経験した家族に対する心理教育 FAIT プログラムのオンライン試行実践」『質的心理学研究』 No.20 pp.S35-S42.
⑦ 福丸由佳 2021 発達支援･親支援プログラムをオンラインで行うことの可能性「CARE による親子関係支援とオンライン実践の取り組み」 臨床発達心理士会全国大会シンポジウム
⑧ 福丸由佳･大西真美･大瀧玲子･曽山いづみ･杉本美穂･本田麻希子･小田切紀子･藤田博康･山田哲子 2022 離婚を経験する家族への心理教育プログラム FAIT の適用可能性―支援者向けワークショップにおける調査から 家族療法学研究 Vol.39. No.3. pp.64-69.
⑨ 横山和宏･福丸由佳･大瀧玲子･渡部信吾 2022 離婚･別居家庭とその子どもの実像と必要な支援―3 つの大規模調査 から見えること― 離婚･再婚家族と子ども研究 Vol.4. 117-135.
⑩ 福丸由佳編 2023 離婚を経験する親子を支える心理教育プログラム FAIT－ファイト－ 新曜社
共著者：青木聡･大瀧玲子･大西真美･小田切紀子･杉本美穂･曽山いづみ･藤田博康･本田麻希子･山田哲子

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 福丸由佳・大西真美・大瀧玲子・曽山いづみ・杉本美穂・本田麻希子・小田切紀子・藤田博康・山田哲子	４．巻 39（3）
２．論文標題 離婚を経験する家族への心理教育プログラムFAITの適用可能性　支援者向けワークショップにおける調査から	５．発行年 2023年
３．雑誌名 家族療法研究	６．最初と最後の頁 64-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 木村一絵・石垣和子・加茂登志子・福丸由佳・重松由佳子・賀村悦子・小柳愛子・内田絵利子	４．巻 19
２．論文標題 2－6歳の幼児の問題行動が減少することを希望した母親に対する地域保健における子育てプログラムCAREの効果－ランダム化比較試験－	５．発行年 2022年
３．雑誌名 石川看護雑誌	６．最初と最後の頁 65-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 福丸由佳	４．巻 6
２．論文標題 子どもと大人に向けた心理的支援の現状と課題－よりよい関係づくりに向けた取り組みを中心に－	５．発行年 2021年
３．雑誌名 日本総研　JRIレビュー	６．最初と最後の頁 4-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 2. 曽山いづみ・大西真美・杉本美穂・大瀧玲子・山田哲子・福丸由佳	４．巻 20
２．論文標題 離婚を経験した家族に対する心理教育，FAIT プログラムのオンライン試行実践	５．発行年 2021年
３．雑誌名 質的心理学研究	６．最初と最後の頁 35-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24525/jaqp.20.Special_S35	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 福丸由佳	４．巻 8
２．論文標題 家族関係における夫婦の葛藤、親子の葛藤-子どもにとっての親の離婚、再婚、親からのマルトリートメント	５．発行年 2020年
３．雑誌名 子ども学	６．最初と最後の頁 87-106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 福丸由佳	４．巻 50（4）
２．論文標題 暴力や体罰のない子育てを考える	５．発行年 2019年
３．雑誌名 心と社会	６．最初と最後の頁 81-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 福丸由佳　伊東ゆたか　木村一絵　加茂登志子	４．巻 54
２．論文標題 里親向け研修におけるCAREプログラムの効果の検討：里子と里親の関係づくりに向けたペアレントプログラムの実践	５．発行年 2018年
３．雑誌名 白梅学園大学・短期大学紀要	６．最初と最後の頁 55-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 福丸由佳	４．巻 35
２．論文標題 育てる～幼少期の親子関係を考える～	５．発行年 2017年
３．雑誌名 家族心理学年報	６．最初と最後の頁 148－154
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計17件（うち招待講演　8件／うち国際学会　4件）

1．発表者名 福丸由佳
2．発表標題 日本でのI-CAREとその展開
3．学会等名 日本心理臨床学会
4．発表年 2022年

1．発表者名 Hitoe Kimura, Kazuko Ishigaki, Hiromi Yonezawa, Toshiko Kamo, Yuka Fukumaru, Akiko Kasahara
2．発表標題 Effects of Child-Adult Relationship Enhancement on child behavior and parenting stress in community health - a randomized controlled trial
3．学会等名 East Asian Forum of Nursing Scholars（国際学会）
4．発表年 2022年

1．発表者名 福丸由佳
2．発表標題 発達支援・親支援プログラムをオンラインで行うことの可能性「CAREによる親子関係支援とオンライン実践の取り組み」
3．学会等名 日本臨床発達心理士会全国大会シンポジウム（招待講演）
4．発表年 2021年

1．発表者名 福丸由佳
2．発表標題 親子のあたたかい関係を支えるために～CAREプログラムを用いたコミュニケーション～
3．学会等名 日本小児看護学会（招待講演）
4．発表年 2021年

１．発表者名 福丸由佳・曽山いづみ・大瀧玲子
２．発表標題 離婚という家族の移行期にある子どもと家族～FAIT(Families in Transition)　プログラムの紹介と実践を中心に
３．学会等名 日本家族心理学会（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 福丸由佳
２．発表標題 I-CARE開発までの取り組みと今後の課題
３．学会等名 第10回　PCIT　CARE合同研究会
４．発表年 2020年

１．発表者名 福丸由佳
２．発表標題 オンラインによる、親子・家族に向けた支援プログラムの実践とその課題
３．学会等名 日本発達心理学会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 福丸由佳
２．発表標題 離婚を経験した親子に向けた心理教育～FAITプログラムの紹介と日本への導入と実践～
３．学会等名 日本発達心理学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 Fukumaru、Y　&　Kamo、T
２．発表標題 CARE Dissemination in Japan
３．学会等名 PCIT International Biennial Convention 2019（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Fukumaru, Y., Kamo, T., Kodaira, K., & Kimura, H.
２．発表標題 Child-Adult Relationship Enhancement in Japan
３．学会等名 PCIT－International Convention（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 福丸由佳
２．発表標題 子どもと大人の絆を深めるプログラム　CAREを用いた関係づくり
３．学会等名 日本小児科医会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 福丸由佳・山田哲子・本田麻希子
２．発表標題 離婚家庭と子どもへの支援～FAITプログラムの紹介と実践～
３．学会等名 日本家族心理学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 福丸由佳
２．発表標題 移行期を経験する子どもと家族に向けた取り組み～研究と実践の視点を踏まえて～
３．学会等名 日本離婚・再婚子ども研究学会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 福丸由佳
２．発表標題 国際化・流動化時代における成人期の発達研究の課題と展望　関係の中における成人期の発達
３．学会等名 日本発達心理学会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 福丸由佳
２．発表標題 ペアレントトレーニングを中心とした臨床心理学的対応　CAREプログラムを用いた子どもとの関係作り
３．学会等名 日本ADHD学会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 福丸由佳・曽山いづみ・山田哲子・杉本美穂
２．発表標題 離婚家庭と子どもへの支援　FAIT(Families In Transition)プログラムの紹介と実践
３．学会等名 日本家族心理学会
４．発表年 2017年

１．発表者名 Ohnishi, Otaki, Odagiri, Murata, Soyama, Sugimoto, Honda, Yamada,Fukumaru
２．発表標題 The effectiveness of Psycho-educational program for divorcing family in Japan
３．学会等名 Annual Conference of Asian Family Therapy in Transition（国際学会）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計6件

１．著者名 福丸 由佳編（共著者：青木聡・大瀧玲子・大西真美・小田切紀子・杉本美穂・曽山いづみ・藤田博康・本田麻希子・山田哲子）	４．発行年 2023年
２．出版社 新曜社	５．総ページ数 225
３．書名 離婚を経験する親子を支える心理教育プログラムFAIT―ファイト―	

１．著者名 福丸由佳（佐久間路子編）	４．発行年 2021年
２．出版社 ぎょうせい	５．総ページ数 131
３．書名 子どもの「こころ」をのぞいてみる	

１．著者名 福丸由佳(佐久間路子・福丸由佳編)	４．発行年 2021年
２．出版社 北大路書房	５．総ページ数 145
３．書名 子ども家庭支援の心理学	

1．著者名 福丸由佳（川島大輔・松本学・徳田治子・保坂裕子編）	4．発行年 2020年
2．出版社 ナカニシヤ出版	5．総ページ数 148
3．書名 多様な人生のかたちに迫る発達心理学　（うち、傷ついた子どもの回復はどのようになされるか？　についての分担執筆）	

1．著者名 福丸由佳	4．発行年 2019年
2．出版社 金子書房	5．総ページ数 499
3．書名 家族心理学ハンドブック　　（うち、離婚と再婚　についての分担執筆）	

1．著者名 福丸由佳	4．発行年 2019年
2．出版社 中央法規出版	5．総ページ数 191
3．書名 子ども家庭支援の心理学　　（うち、多様な家庭とその理解　についての分担執筆と編集）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	森田　展彰 (Morita Nobuaki) (10251068)	筑波大学・医学医療系・准教授 (12102)	
研究分担者	藤田　博康 (Fujita Hiroyasu) (80368381)	駒澤大学・文学部・教授 (32617)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	門田　行史 (Monden Yukifumi) (80382951)	自治医科大学・医学部・准教授 (32202)	
研究分担者	水島　栄 (Mizushima Sakae) (00790940)	北里大学・医学系研究科・教授 (32203)	
研究分担者	木村　一絵 (Kimura Hitoe) (30432909)	福岡国際医療福祉大学・看護学部・講師 (17102)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会	開催年
PCIT-Japan & CARE-Japan 合同研究会	2018年～2018年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関